

## 詩篇97篇

## 《被造世界の喜び》

- 1 【主】は、王だ。地は、こおどりし、多くの島々は喜べ。
- 2 雲と暗やみが主を取り囲み、義とさばきが御座の基である。
- 3 火は御前に先立って行き、主を取り囲む敵を焼き尽くす。
- 4 主のいなずまは世界を照らし、地は見て、おののく。
- 5 山々は【主】の御前に、ろうのように溶けた。全地の主の御前に。
- 6 天は主の義を告げ、すべての国々の民は主の栄光を見る。

## 《異教徒と聖徒》

- 7 偶像に仕える者、むなしいものを誇りとする者は、みな恥を見よう。すべての神々よ。主にひれ伏せ。
- 8 シオンは聞いて、喜び、ユダの娘たちも、こおどりました。【主】よ。あなたのさばきのために。
- 9 まことに【主】よ。あなたは全地の上に、すぐれて高い方。すべての神々をはるかに抜いて、高きにおられます。
- 10 【主】を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。
- 11 光は、正しい者のために、種のように蒔かれている。喜びは、心の直ぐな人のために。
- 12 正しい者たち。【主】にあつて喜べ。その聖なる御名に感謝せよ。

「王としての神」をテーマとした詩篇がもうしばらく続きます（93～100篇）。それにしましても、本篇冒頭の「主は、王だ」という宣言は何と明快でしょう（原文では「יהוה מלך」／イエホヴァー・マーラーク）／直訳：「主は統治しておられる」。では、主は誰にとっての王なのか。本篇では、主の統治領域が三つに分類されています。

- ①被造世界全体
- ②異教徒
- ③聖徒

以上の分類にしたがってまとめてまいります。

## ①被造世界全体

1～6節では、被造世界を表す様々な表現が出てきます。「地」「島々」（1節、4節）、「雲」「暗闇」（2節）、「火」（3節）、「いなずま」（4節）、「山々」「全地」（5節）、「天」（6節）。「島々」とは、パレスチナから見た地中海やエーゲ海の島々と沿岸地方を指す表現ですが、広い意味ではまだ当時は認識されていなかった日本も想定されていると言ってよいでしょう。「雲」「火」は、

近づきたい神の聖さを表すことばですが、荒野でイスラエルの民を導いた「雲の柱」と「火の柱」を思い起こさせます（出 13:21-22）。「いなずま」はシナイ山で現れた神の栄光の一つとして描かれており（出 19:16）、光と対極にある「暗闇」は神の秘められた御心や性質を表す詩的表現と捉えられそうです。「山々はろうのように溶けた」という表現は、（勝手な想像ですが）雪崩や山津波のように、人間の力の及ばない大自然の脅威を通して現れる神の栄光と言えまじょうか。

いずれにせよ、詩人は世界に満ちるすべてのものが神を讃えていると言おうとしているのです。

7節以下では、「異教徒と聖徒」それぞれに現される神の栄光という内容に移ります。

## ②異教徒

イスラエルから見た諸外国の他神崇拝者（および偶像）について、様々な表現が出てきます（「偶像に仕える者」「むなしいものを誇りとする者」（7節）、「すべての神々」（7節、9節）。そして、その中には悪を企む者がいることも添えて伝達されています（「悪」「悪者ども」（10節）。神がただ一人であるなら、そもそも「偶像」というもの自体が存在しないこととなりますが、本来ないものを人間は崇拝し、自分にとって都合のよい「神」を作り出します。しかし、詩人はそのような「神々」には力がないと、臆面もなく語るのです。更に、その神々に対して「主にひれ伏せ」（7節）と命じ、王の王、主の主である方にこそ栄光を帰させようとしています。

ここでの特徴は、主の顕現を見る異教徒たちの心に喜びがないということです。主の栄光が現されたとき、認めたくないけれど認めざるをえないという状況に追いやられているように思えます。

## ③聖徒

一方、主を知る者たちは小躍りして主の来臨を喜びます。聖徒を表す様々な表現を拾い上げてみましょう。「シオン」「ユダの娘たち」（8節）、「主を愛する者たち」「聖徒たち」（10節）、「正しい者」「心の直ぐな人」（11節）、「正しい者たち」（12節）。この中で最初に出てくる「シオン」ということばは捕囚後再建されたエルサレム神殿の丘を指し、「ユダの娘たち」はエルサレム近郊の村落を指します。つまり、この詩篇は捕囚から帰還した民がエルサレムに再び住むようになった時代を背景としているのでしょう。神殿再建にあたっては多くの妨げがあったことが分かっていますが（ネヘミヤ記など参照）、最終的には神のご計画が成っていったことを歴史が証明しています。

詩篇 97 篇から受け取るメッセージは、私たちはいずれの心で主を迎えるかということでしょう。再臨の主が来られるとき、すべての人が主を王の王、主の主として認めることとなります。

それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。（ピリピ2:10-11）

その日、私たちは「主を愛する者たち」「聖徒たち」「正しい者」「心の直ぐな人」として小躍りできるように、祈りつつ歩んでいきたいと思えます。